それを母に言うと、
信用していないようで、
僕の服装にいろいろ注文をつけて来る。
いつもなら着ないような、
少し、はでな茶色の編み目の入った、
ガラもんの、半袖のシャツを着せられた。
それだけでなく、まだ、細かく要求する。
「そうやなあ、よっちゃん、
いつも書いている絵を、
一枚持って行きよし。」
僕は、少し、困った。
卒業証書を入れるような筒を
物置きから持って来て、
わざわざ、用意してくれる。
「おばに書いてる絵を見せてあげなさい。
よっちゃんのうまい絵を見て、
おば、きっと、喜ぶよ。」
と、母はニコニコしながら言った。
「そうかあ。」
僕は、気が乗らなかったが、母に従った。
家を出て、空を見上げると、昨日と同じ太陽。